

・

問題の所在

本発表はケインズを媒介にして、ノーマン・イングランド銀行総裁(1920-1944)の評価を再考する。言わば、経済学史と金融史の接点を探ろうとする試みである。

・

ノーマンの2つの評価

ノーマンの政策体系(その意図と結果)については、2つの見解が鋭く対立している。第1の立場は、その性格を「意図的デフレ政策」と規定する伝統的な見解である。Pollard [1992]など、ケインズ主義に好意的な論者がその代表である。第2の立場は、ノーマンの政策を非常に革新的なものとして讃え、従来の見解に大幅な修正を迫る見解である。Clay [1957]や Sayers [1976]が代表的であり、特にイングランド銀行の「産業合理化」の側面に光を当てた。特に第2の陣営の中で、田中[1976]はノーマンの政策を、「ディス・デフレーション政策」(高金利の悪影響を認めつつ、その更なる悪影響を回避しようとする政策)を目指したものと規定した。また、吉澤[1986]はこの対立する見解を整理しつつ、ノーマンの産業介入の性格を国際主義の延長線上に把握した。本発表は特にケインズとの関係を熟慮し、ノーマンの実像を再確認する。

・

要約的結論

1920年代の金融政策・産業政策をケインズとの比較で顧みる時、ノーマンの革新性は限定的に考えるべき、と本発表は結論する。主な主張は次である。・「ノーマン=意図的デフレ政策」について

この評価は適切でない。ケインズとの対立軸が<国際主義 vs 国内主義>のみに還元・縮小されてしまうからである。

・

「ノーマン=ディス・デフレ政策」について

この評価は無理がある。この解釈の弱点は、ノーマンがデフレに対抗的な経済政策を打

ち出していない所にある。その点、ケインズはデフレに対抗する種々のアイデア（利子率の長短分離政策・信用の量的緩和など）を提唱していた。また、為替安定のための様々な装置（金為替本位制度・為替平衡勘定など）も提案し、そのいくつかは実際に作動した。

新しい解釈

「ノーマン＝不況～金融政策の無関係説」という解釈を与える。ノーマンは国際均衡優先主義（＜シティの利益＝イギリスの国益＞とみなし、究極的には国内産業より国際金融筋を優先する考え）に立脚しつつ、経済の自動調整機能（イギリス金融正統説）を信頼する思考を持っている。そのため不況（失業）の原因や救済を自らの責務と切り離し、経済の自動機構を乱すような裁量的政策を忌避した。このように解釈してこそ、ノーマンの政策体系の意図と帰結を適切に評価できる。

Clay, H. Lord Norman, London: Macmillan 1957

Pollard, S. The Development of the British Economy, Fourth Edition 1914-1990 Victoria, Australia: Edward Arnold, 1992

Sayers, R. S. The Bank of England 1892-1944, 2vols. and Appendixes, Cambridge: Cambridge University Press, 1976 西川元彦監訳 『イングランド銀行～1891-1944年～』東洋経済新報社 1979

田中生夫「公定歩合政策に関するノーマン総裁の証言ーイギリス再建金本位の金融政策研究序章ー」『金融経済』（金融経済研究所）No.158 pp.1-27 1976.6

平木良子「大戦間期におけるイギリスの産業合理化と公定歩合政策ーマクミラン委員会におけるノーマン総裁とケインズの証言をめぐってー」 mimeo pp.1-17 1997.8

吉澤法生『イギリス再建金本位制の研究』新評論 1986

(新潟産業大学)

komine@nsu.ac.jp

(コメントへの回答)

・
ノーマンが高金利の悪影響を熟知していることは、十分に承知している。しかし、ケインズの提唱した様々な裁量的金融政策――極めて具体的であり、そのいくつかは実際に実現する――と比較した場合、金融当局の最高責任者として「デフレに対抗的な政策を施した」とは評価できない。「デフレ放置」とはこのような意味を含めているが、用語として誤解を招く恐れがあり、改訂版では表現を改めることを考えている。

・セイヤーズの認識は非常にバランスがとれていると、発表者も同感する。ただし、摩擦的や自発的ではない失業の部分（つまり有効需要の不足によって生じる失業の部分）に対しては、特に直接的な「大がかりな措置」が必須であった――そし経済の管理化は、1941年予算や1944年雇用白書などで実現していく――、というケインズの認識と対照する必要があるのではないか。

(謝辞)

――ノ瀬篤先生（岡山大学）からは元原稿のミスのご指摘を含め、大変に有益なコメントを頂いた。また、司会の高山洋一先生（大東文化大学）や平木良子氏（早稲田大学大学院）は、当日の発表の手助けをして頂いた。ここに記して感謝したい。